

『グランド・ブルテッシュ綺譚』を読む

—『続・女性研究』論 その4—

柏 木 隆 雄

要 旨

『大手前大学論集』第17号、第18号と連続して論じてきたバルザック『続・女性研究』を構成するいくつかのエピソードの掉尾を飾る『グランド・ブルテッシュ綺譚』を取り上げ、その語りの技巧をできる限り詳細にテキストを精読して論じる。バルザックの『人間喜劇』の冒頭に位置する『私生活情景』およそ30篇の最後を飾る短編にふさわしく、グランド・ブルテッシュと称される領地にある見捨てられた館に秘密を感じた医師ビアンションが様々な語り手の話から、ついにその館の旧主であるメレ伯爵夫人の死の秘密に辿り着くまで、極めて精巧な「入れ子構造」を用いて、『私生活情景』のメインテーマである若い女性の結婚の幸・不幸を巡る心理や社会の襞を、巧妙な語りを駆使しつつ暴き出していることを別掲するのが本稿の主旨である。

キーワード：バルザック、『続女性研究』、『グランド・ブルテッシュ綺譚』、
短編小説技法、『私生活情景』

I 『大佐の女』から『グランド・ブルテッシュ綺譚』へ

バルザック『人間喜劇』は、『風俗研究』、『哲学的研究』そして『分析的研究』の3部を構成する小説群からなり、さらに『風俗研究』は『私生活情景』、『地方生活情景』、『パリ生活情景』、『軍隊生活情景』、『政治生活情景』そして『田園生活情景』と分かれ、なかでも『私生活情景』を成す作品数は他の情景にくらべてもっとも多い。その最後に位置する『続・女性研究』は、その複雑な成立の経過からも、バルザックの『人間喜劇』成立の一つの雛形として味読するに値する作品である。すでに本論集

で二度、他の場所で1度、作品を構成する各エピソードを論じてきた¹⁾。その4としてここで扱う『グランド・ブルテシュ綺譚』は、いわば『続・女性研究』の結論のごときものとして、掉尾を飾る作品となる。

女流作家デ・トゥッシュ嬢の夜会に集まった客の中で、二次会とも言える形でサロンに残った彼女の友人たちの間で交わされる各人の打ち明け話から、アンリ・ド・マルセーの初恋の女性へのはらいせの仕打ちに引き続いて「申し分のない女」の詮議、それを受けて現代の女性たちが決して男たちに劣らず立派な働きをしている、とのカディニアン大公夫人の意見に賛同したモンリヴォー将軍が、

けれども必要とあれば、そうした女性が、しなを作っては気取って歩き、誰やら彼やら男たちの考えを、そのままおちょぼ口で喋り散らすような人でも、英雄のような行動を取ることがあるんです。それに、はっきり申せば、あなた方女性の過ちはいっそう詩的なものになるのです、いつもじつに大きな危険に晒されれば晒されるほど。²⁾

と前置きした後、ナポレオンのモスクワ戦役退却のさなか、部隊長とその不倫の相手の女が彼女の夫に焼き殺される惨憺たるエピソードを語る（『大佐の女』³⁾）。有無を言わさぬ形で、部下の隊員にも、愛人にも暴威を振るうイタリア人の大佐に、その寝室から満座の中で名前を呼ばれ、意を決して夜伽に行く大尉の妻ロジーナの行為は、確かに夫への裏切りではあるが、敗走中のごたごたの最中、他の兵隊たちが、まして夫自身も、まるで意志の失せたような行動を取る時、一つの堅い意志で、自らの行動の責任を取る姿でもある、と言っている。

これをさらにドラマティックにすれば、1870年の普仏戦争下のエピソードを取り上げたモーパッサンの『脂肪の塊』（1880）のヒロインの行動となるだろう。モーパッサンは、あるいはバルザックのこの短編から学ぶところがあったのかも知れない。娼婦「脂肪の塊」が、敵のドイツ将校に身を任せるのは、いっそう愛国的な自己犠牲だが、しかし自分の夫の目の前で、敵兵でない大佐の床に呼ばれるロジーナの立場は、

- 1) 冒頭の「第二のサロン」論とマルセーの人妻との恋のエピソードについて、柏木隆雄「バルザック『続女性研究』における二つのサロン—冒頭の意義—」、『大手前大学論集』、第17号、2017.3、pp. 89-109。および柏木隆雄「バルザック『続女性研究』を読む—アンリ・ド・マルセーの恋—」、『大手前大学論集』、第18号、2018.7、pp. 153-186。
柏木隆雄「バルザック『大佐の女』における「沈黙」、『Correspondances (コレスポンダンス)』—北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論集』2020.2.28、pp. 159-171参照。
- 2) Balzac, *Autre étude de femme*, in C. H., III, Pléiade, p. 702, 1976. 以下バルザックの『続・女性研究』本文の引用は、このテキストを用い、引用文の後に、頁数を記すのみとする。
- 3) 柏木隆雄「バルザック『大佐の女』における「沈黙」、『Correspondances (コレスポンダンス)』—北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集』、朝日出版社、2020.2参照。

いっそう屈辱的で、破廉恥な行為ではなかろうか。大佐と彼女は、夫の嫉妬と自尊心による放火で焚殺され、いわゆる天罰を食らうが、その吠え声で男の存在が象徴され、女の方は、か弱い声を発するところに、作者の意図が込められていよう。すなわち、男の怒号とは逆に、女の声のか細さに自らが犯した罪に対しての罰を運命として受け入れる人妻の姿勢を感じることができる⁴⁾。

モンリヴォーが語る「大佐の女」のエピソードは、短編として見事に出来上がっていて、深刻な人間心理を、あからさまな言葉を使わず、暗示的に展開して、その凄みにおいてモーパッサンの優れた短編をも凌駕するのではないかとさえ思われる。しかし「凄み」といえば、モンリヴォーに続いて、ビアンションが語る物語は、いっそう生々しく残酷だ。

モンリヴォーの話を聞いたアンリ・ド・マルセーが、「何が怖いといって、羊の反抗ほどの怖いものはないね」と言うのと、『ユルシュル・ミルウエ』(1841)で極めて敬虔で清純な姿を見せ、結婚後も誠実な貴婦人として過ごすポルタンディエール夫人が、「恐ろしいことですわ、そんな怖い姿がいつまでもつきまとして記憶に残るのでしたら」(p.709)と応じる。生活態度、信条において、それぞれ極端に相反する男女の対照的な反応を記すところに作者の心憎い仕掛けがある⁵⁾。

アンリ・ド・マルセーは、デ・トゥッシュ嬢邸の夜会の冒頭で話題にした女性、すなわち彼が17歳で恋をした美しい貴族の未亡人が、そのカムフラージュに贋の恋人と偽装した侯爵と結婚した後、意外や穏やかな一生を終える。その臨終の場に立ち会った医師ビアンションに、マルセーの事実上の父、イギリス貴族のダッドレー卿が、息子のかつての恋人はどのような亡くなりかたったか、と問いかける。ビアンションは『続・女性研究』全体の語り手で、後に語られる「グランド・ブルテッシュ」の館での出来事と深い関わりがあるから、彼が語るマルセーのかつての恋人の最後について、どう語っているかを一通り見ておこう。看護に疲れて夫の侯爵が眠り込んでしまった後、ビアンションは侯爵夫人の病床に立って、死に行く様を見つめたと言う。

「そうです」と私は答えた。「その人の死は、私の知る限り一番美しいものの一つでした。侯爵と私は臨終近いその人の枕辺にいました。その人の肺の病は最後の段階に来ていて、どんな望みもありませんでした。もうその夜に塗油の秘蹟を授けられていました。」
(p.709)

侯爵夫人はすでに朝四時頃には目覚めていて、夫の侯爵を眠るままにしておくよう

4) 柏木隆雄「前掲論文」参照。

5) 柏木隆雄『バルザック詳説』水声社、2020、第Ⅱ部第1章参照。

仕草で示す。「表情といい、形といい、本当に崇高なまま」、厳とした静謐が息づいていた。ピアノシオンはさらにこう付け加える。

「彼女はかえって夫の侯爵を可哀想に思っているようでした。そういう感情は、刻々死が近づいて、もはや限界を知らなくなっているようにみえる優しさの極みから出てくるのです。」 (Ibid.)

ここでは、死の床にある侯爵夫人、看護する夫の侯爵二人の間に、信頼しきった夫婦の感情があることを示す文章であることを確認するだけでよい。モンリヴォーの「大佐の女」に登場する大尉とロジーナ、またロジーナと大佐の関係と著しい対照を示すのは明らかだろう。

しかし、サロンに集まった人々は、そうした理想に近い愛の終焉よりも、もっと刺激的な話を好む。そのうちの一人レトレ侯爵が「医者先生がお話になる物語は、じつに印象深いものがありますな」と言えば、サロンの主人デ・トゥッシュ嬢は、「でも甘いわね」と混ぜ返し、ピアノシオンは彼女の反応を見て、「いや、自分にもいろいろ恐ろしい話のネタはありますよ」と負けぬ気を出して語り始める。それが最後のエピソードの「グランド・ブルテッシュ綺譚」である。

II 廃屋の語るもの

医師ピアノシオンはつぎのように語り始める。

「ヴァンドームからそれほど遠くないところ、ロワール川の岸辺に」と彼は言った。「古い家があり、褐色で屋根が高く、しかも完璧にぼつんと離れているから、その周囲には臭い匂いの染色工場や安宿など見あたらない。ほら、大抵の小さい町の周辺にはよく見かけるものですがね。この住まいの前には庭園が川に面しており、かつては黄楊の木が短く刈られて、くっきりと小径に沿っていたのが、今は伸び放題。数本の柳も、ロワール川で生えたのが、たちまち伸びて、まるで生け垣のようになり、家の半ばを隠しているような状態でした。」 (p. 710)

語り出す口調は、1830年代から短編小説によくある典型的な書き出しだ。ヴァンドームはロワール河流域の、シャルトルとトゥールとのちょうど真ん中あたり、バルザックがその地のカトリックのオラトリアンの学院で少年時代を過ごして、その思い出をふんだんに盛った小説『ルイ・ランベール』(1832年稿、1835年改稿)の舞台で

もある。トゥールはいわゆるロワール河が町を横切るが、このロワールは女性形で、La Loire、フランス随一の大河である。しかしヴァンドームを流れる男性形ロワールはせいぜい300キロ、女性形のロワールが1000キロ以上を潤すのと異なる。

物語の舞台が、ヴァンドーム周辺、ロワール川の岸辺にある「古い家」で、「完璧にぽつんと離れている」のは、19世紀に入ってよく読まれた、いわゆる「暗黒小説」le roman noir あるいは「恐怖小説」le roman terrifiant と呼ばれる種類の常套的シチュエーションで、当時の好みを映した語りであることがわかる。また都会でなく、かつてはきちんと刈られていた庭園の木が、今は伸び放題になり、人手が入らないために自生の柳がどんどん伸びて、家の半分を隠すに至っている状況から、住居の無人が仄めかされ、かつて人の住んでいた時と現在の落差を示して、そこに至る経過に注意を向ける仕掛けになっている。柳が「隠す」cacher とあるのは、「秘密」に縁のある動詞が、「隠されている」家そのものも秘密のあることを告げてもある。物語の書き出しとして、古典的ではあるが、上々のものと言っていいただろう⁶⁾。

庭にある果樹も10年も放っておかれて、果実を実らせることなく、いたずらに大きくなって雑木林のようになり、小石が引かれた小径も、今はスベリヒユがはびこり、人の足跡も見えない。けれどもかつては貴族の快適な住まいだったと思わせるものがある、と続く文章も、すこし意図が見えすぎる点が気になるものの、やはり何らかの事件性を窺わせる。もっとも、女流小説家カミーユ・モーパンの夜会で、他の話者に伍して真面目が売り物の医師ビアンションが恐ろしい物語を始めたのだから、おどろおどろしい口調は当然のことだろう。次の描写は、さらに恐怖心を煽るように語られる。

こうした陰惨かつ甘美な思いを誘って魂を捉えるものをさらに補うように、一方の壁に日時計があり、それがいかにもブルジョワ的な信仰を示す銘句が刻まれている。「最後を考えよ！」ULTIMAM COGITA! 屋根は怖ろしいほど傷み、錠戸はいつまでも閉じられて、バルコニーはツバメの巣で覆われ、扉は常に閉じられたまま。(略) 陰鬱な静けさがあたりを支配して、それを乱すのは、ただ小鳥や猫、貉、大鼠や小鼠ばかり。連中は欲しいままにうろつき、争い、食い合ったりする。なにか目に見えない手が、いたる所に「謎」の文字を書いているようだ。(p. 711)

「陰惨かつ甘美な思いを誘って魂を捉えるものをさらに補う」compléter les idées

6) この記述からバルザックの旧知の邸を、ヴァンドームあるいはトゥールの地に探して、モデルとなった家を特定する研究が多いが、観光のパンフレットに記すならともかく、この小説を読み解くことにそれほど役立つとは思わない。

tristes et douces qui saisissent l'âme の表現は、いかにも「暗黒小説」としてのポインントを押さえて読者の心を捉えるだろう。ロマネスクの大抵は、この二つ「陰惨かつ甘美な」を適宜に組み合わせたものにほかならない。いかにもカトリック的なラテン語の成句は、最後の審判の際、神の前でどう裁かれるかを考えて行動せよ、という警句だが、同時に死に方を考えよ、という意味にも取れて、ビアンションに先立つモンリヴォーの「大佐の女」、加えてその淵源ともいべき英雄ナポレオンの最後にも思い至らせる文字ともなる。そしてビアンションが語る物語の結末をも「考えよ」、あるいは「期待せよ」の意味もまた含蓄するのは言うまでもない。

「鎧戸はいつまでも閉じられており、バルコニーはツバメの巢で覆われ、扉は常に閉じられたまま」とある文章、closes, couverts, fermée と、覆う、閉じるといった、いかにも重苦しい、隠蔽の意に満ちた語が連ねられ、それが「つねに」toujours とか「絶えず」constamment といった永続性、恒常性を表す副詞が、いっそう閉塞性を添えて、いやが上にも館の雰囲気を秘密めいた、犯罪めいたものにする。ここで次の言葉が続くことに注目。

いかなる炎が天から落ちて、ここをって行ったのか？いかなる審判が、この住まいに塩を撒けと命じたのか？神を侮辱したものがここにいたのか？この誰かがフランス国を裏切ったのか？と、つい自問してしまう。そこあたりで這い回っている爬虫類たちは何一つ答えない。この家は、空っぽのまま、見捨てられたまま一つの大きな謎としてあり、その謎を解く言葉は誰一人知らない。(p. 711)

天からの劫火は、罪人に対する罰を示し、この住まいの住人に対する審判をも意味するだろう。しかしこの疑問符の列を注意して見てみると、個人的な犯罪の匂いから、だんだんと国家的な犯罪へと広がっていることが分かる。館の荒廃の様がそれだけ尋常でないことを思わせるが、同時に先にモンリヴォーが語ったベレジナ渡河の際の悲劇が、ある意味で個人の悲劇ながら、じつはその背後に大きな歴史的経過が潜んでいたことを述べていたように、ここでも個人の histoire と大きい歴史 Histoire の二つが重なっている⁷⁾。投げかけられた問いに対して、「そこで這い回っている爬虫類たちは何一つ答えない。」とあるのも意味深長だ。というのも、この字句、表面的には、荒廃した家で這いまわるトカゲ、蛇など何一つ答えない、といかにも常套句 cliché に類するものとして片付けられかねないが、しかし、なぜ「爬虫類たち」Les reptiles なのだろうか。その2、3行前に館には「巨大なトカゲが壁をうねうねと動

7) 柏木隆雄「前掲論文」参照。p. 171

き回る」があり、「巨大なトカゲ」lézards の語を繰り返さない修辭的理由から、という答えは当然出てこよう。しかしそれだけだろうか。

「爬虫類たち」Les reptiles の語は、一般に蛇を代表とする爬虫類をいう。そしてここで「這う」ramper という動詞を使っていることに注意しよう。かつて聖書にアダムとイヴを誘惑した蛇のことが思い出されよう。蛇は神からアダムたちを誘惑した罪で、その罰として終生地を這いまわる ramper ことを命じられた。もの言わぬ爬虫類は、かつての樂園におけるイヴに対する誘惑を想起させる。じっさいこの家の周辺は、かつて天国の花園のようにさまざまな花や果実が植えられて、豊かな色彩を誇っていたと記されている。天の炎や審判の譬喩が出て、何かそうしたものの侵犯が、この家の荒廃をもたらしたと暗示し、さらにその侵犯は女性が誘惑に負けたことから発することを寓しているのではないか。いずれにしても、語り手の意味深長な言葉遣いが、この家の「大きな謎」une immense énigme として読者に印象づけられることが、まずは語り手の最大の関心事であることは注意しておく必要がある。

Ⅲ メレ伯爵夫人の寢室

館のある地はグランド・ブルテッシュ Grande Bretèche と称する貴族の小さな領地で、Bretèche というのは城郭にある銃眼のある櫓を言い、中世の面影を残す名だ。ビアンションは医学の師であるデブランと共にヴァンドームを訪れ、この地の金持ちの病人の診察を任されて宿に留まっている。館の佇まいに強く興味を引かれたビアンションは、夜となると、一人でその庭に入り、どうしてこの家が人の住まぬ荒れ果てた住まいとなってしまったのか、さまざまな推測を逞しくして、ロマネスクな空想に耽る。

私はそこで何度も涙を流した。笑うことは決してなかった。一度となく、何かしら恐ろしいものを感じた。そこで聞こえるのは、森の鳩の羽根を縮ませている頭上の音なき風。土はしっとりと湿っている。気を付けなければいけないのは、あたりを好き放題に歩き回っているトカゲや蝮、蟾蜍の類だ。なによりも冷気を懼れなくてはならない。というもたちまち氷の外套が自分の肩にかかるのがわかる。あの騎士の手がドン・ジュアンの首にかかるように。ある晩、私は身震いした。風が錆び付いた古い風見を廻して、キリキリいう音が、あたかも館から吐き出される呻き声のように思えたのだ。折しも私はずいぶん陰惨なドラマを想像するようになっていて、こうした前代未聞の苦しみがどこからくるのか、納得できるようなものを考えていた。(p. 712)

シャトーブリアンの1820年代の文章、あるいはロマンティック初期の暗黒小説風で、若き日のバルザック自身の空想癖をも覗かせるような言葉遣い。ビアンシヨンの述懐にどれほど1820年代の文学的テーマが鑲められているか、研究してみるのも一興だろうが、それはともかく、恐怖小説風の思いにとらわれ、宿に帰ってからも瞑想しつつ食事するビアンシヨンを訪ねて一人の客があった。ルニョーという町の公証人である。くたびれた、古い黒の背広を来て、ひょろひょろと細く、痩せた、汚いコップに似る顔色、といった描写は、これまでのロマンティックな、しかし陰鬱な状況描写とうってかわってコミックで、バルザックがしばしば行う文章の転換、雰囲気転換で、緊張と弛緩のリズム、といってもよい。

公証人ルニョーはいったい何の用があってビアンシヨンに面会を求めたのか。

彼はグランド・ブルテーシュの庭園をビアンシヨンがしょっちゅう徘徊する理由を問いただし、グランド・ブルテーシュの持ち主だったメレ伯爵夫人の遺言執行人として、屋敷への立ち入りを遠慮してほしいと言う。いかにも田舎の法律屋らしく、慇懃、傲慢な口調は笑わせるが、その彼自身が、伯爵夫人の遺志、自分の死後に住居と庭へ一切の人間を入れないことの奇妙さを自ら言い、ビアンシヨンの好奇心を煽る。そして同時に、おしゃべりな性格を露わにして、自分がパリのロガン公証人の第一書記だった経歴を明らかにし、ロガンが破産するに及んで（彼の破産は『人間喜劇』のさまざまな場面で言及される）故郷のヴァンドームに帰り、公証人となったと言う。

伯爵夫妻は領地であるメレの城館を住まいとしたが、その以前はグランド・ブルテーシュに住んでいた。伯爵がパリへ出た後、夫人はメレに残ったが、伯爵がパリに出た日に、グランド・ブルテーシュにあった家財を城に移し、その家具をすっかり焼き払ったという。移った3ヶ月ほど、妻は一階、夫は二階で別れて暮らし、その夫はパリで道楽の限りを尽くして惨めに死んでしまった。伯爵夫人は城に籠もって誰を呼ぶこともせず、外出するにしても教会に行く時だけ。彼女はグランド・ブルテーシュを離れた時から人が変わったような態度やふるまいとなった。彼女が臨終の際に呼んだのがこのルニョー一人だという。その時の様子を彼は次のように語る。

「天井が高く、暗くて冷たい、そしてじっさい湿った大きな部屋をいくつか通って、やっと立派な寝室に辿り着くと、そこに伯爵夫人がおられました。いろいろな噂がこのご夫人にはありましたから（いや、あなた、あの方に関わるそういう話をすべてあなたに繰り返していたら終わりませんよ）、私はコケットな女性を想像していたのです。」
(pp. 715-716)

ルニョーが通っていく幾つもの部屋の描写は、「暗黒小説」そのままの語彙が頻出

する。「天井が高く、暗くて冷たい、そしてじっさい湿った大きな部屋」de grandes pièces hautes et noires, froides et humides en diable は、いかにも古めかしい城館の雰囲気を出しており、それらを「通って」、やっと立派な寝室に「辿り着く」描写に、長々しく、かつ重々しい表現が挟まれることによって、大きな部屋に圧倒されながら、ルニョーが伯爵夫人の寝室にやっと到着するありさまが目浮かぶ。あたかも冥界の迷路を辿ったあげくに、そこに君臨する女王に面会するような道筋は、いかにも『暗黒小説風』で、彼女をコケットだと思っていた、とあるのも伯爵夫人に関してロマンスな想像をたくましくさせる。「グランド・ブルテューシュ」の禁忌、巨大な邸宅、彼女と夫との奇妙な関係、邸を去った後の夫婦の奇矯な振る舞いが先に語られているだけに、夫人の臨終の様子はいっそう読者の興味をそそる。

懸命に目を凝らして、ベッドに近づいていくと、やっとメレ夫人の姿が見えました。それもランプの光があったからで、明かりは枕元を照らしていました。顔は黄色く蠟のようでした。それに両手が組まれているように見えます。伯爵夫人はレースのボンネットを被っておられましたが、そこから美しい髪の毛がのぞいていて、それが糸のように白いのです。彼女は身を起こしておられるものの、その姿勢を保つのがずいぶん苦しそうでした。大きな黒い眼が熱のためにやられたのでしょう、多分。もう生気がほとんどなく、眉のある骨の下でわずかに動いているばかりです。(p. 716)

ルニョーのおっかなびつくりの表現は、いかにも恐怖小説の登場人物のような様子を見せる。薄暗い、ランプの明かりから浮き上がる、まるで死人同然のおぞましい姿。「蠟のように黄色い」jaune comme de la cire、あるいは「糸のように白い」blancs comme du fil、と部分冠詞があるだけにいっそう具体的で、生々しい。さらに伯爵夫人の無慚な姿の描写は続く。

両の手は肉が落ちて、まるで骨が脆い皮で覆われているようでした。静脈や筋肉がすっかりよく見えるんです。きつととても美人だったに違いありません。ところが、その時には、いやはや！私は何かわけのわからない気持ちで胸ふたぎました。あの方の様子を見たら、ね。これほどまでに、と、あの方に屍衣を着せた連中が言うんですよ、生きている人間で、これほど痩せて、それで死なずにいた人はいないって言うんです。いやはや、見るにおぞましいものでした！(p. 716)

メレ夫人の様子を実におぞましい克明なイメージで公証人に描写させるのは、もち

ろん恐怖小説的趣味もある。しかしそれ以上に、彼女の死の悲惨さを強調することで、そうした死にいたる原因、過程への興味をそそることにあるだろう。同時に、「美しかった髪」や「きつととても美人だったに違いない」の表現で、その美しい頃のヒロインと凄惨な死の落差を読者に印象づける。さればこそ「美しかった髪」が白髪になり、あたかも骨と皮の骸骨同然となった美人の姿を、その結末を先取りして描いておくのだ。そしてルニョーの言う「その黒い眼が高熱にやられたのでしょうか、多分。」“abattus par la fièvre, sans doute,” というだけなら、それほど痩せはすまいと、想像をいっそう逞しくするに違いない。

ルニョーはさらに、瀕死の状態にも関わらず、夫人が遺言書を作成するため苦しい中を必死に努力する様を語る。奇妙なことに枕辺に侍る家族もいない。物音一つしない、茫漠として広い城館に、年老いた家政婦が一人ついているだけ。たった一人で死んでいく夫人は、ようように口を開き、最後の力を振り絞って、遺言をルニョーに託す。

「あなたに私の遺言書を託します。」と彼女は言いました。「ああ！神様！ああ！」それがすべてでした。彼女はベッドの上にあった十字架をつかむと、すばやく自分の唇にもっていき、そして亡くなりました。じっと見据えた眼の表情ときたら、今でもちょっとと思うだけでぞっとしますよ。きつとずいぶん苦しめたに違いありません。最後のまなざしには喜びが浮かんでいました。その感情があの方の死んだ眼に刻まれて残っていました。(p. 717)

印象的なのは、ベッドの上においてある十字架と、瀕死の力を振り絞って彼女がそれに口づけし、じっと見据えた両の眼に何かしら喜びの表情があることだ。十字架は本来壁にかかるか、テーブルの上に置かれる。ベッドの上にあるのはそれだけ彼女が身近なものとして、それこそ肌身離さずもっていたことを示す。そのことは最後に至って彼女がそれに口づけする行為にも表れている。最後の眼に残る喜びの表現は、かくの如く信仰に生きた満足感だろうか。しかし最後の「ああ！神様！ああ！」Ah! mon Dieu! Ah! は、祈りの言葉ではなく、むしろ後悔か、怒りの表現のように響く。それならば最後に見せる喜びの表情はどこからくるのだろうか。彼女の死は謎が深い。

遺言書の中身についても同様だ。彼女は全財産をヴァンドームの病院に遺贈し、「グランド・ブルテーシュ」は彼女の逝去の日から50年間はそのまま残し、その間、何人も入れず、修復もさせぬという。そして50年経てば「グランド・ブルテーシュ」はその公証人ルニョーあるいはその後継者に遺贈する。ビアンシヨンの好奇心をいやが上にも高めたルニョー氏は、得意満面で帰っていく。彼の話は聴き手のビアンシヨン自身が「ラドクリフもどきの小説」“un roman à la Radcliffe” というように、恐怖

小説そのままだ。

Ⅳ マダム・ルパの問わず語り

ルニョー氏が帰ると、ビアンションの好奇心を見すましたように、宿の上さんが部屋を訪れて、もの言いたげな様子だ。水を向けると、最初は秘密など無いといいながら、上さんはメレ夫妻の家庭について語り始める。

宿屋の上さん、マダム・ルパは、まずド・メレ伯爵がピカルディ出身の立派な紳士 *digne gentilhomme* で、すらりとした背の高い、活発な美男、「すぐかっとなる性格」 *la tête près du bonnet* ながら、貴婦人達には親切な男と思われていた、と言う。メレ伯爵夫人はヴァンドーム地方で並ぶもののない美人で裕福な貴族だった。結婚しての夫婦の折り合いを尋ねるビアンションに、マダム・ルパは以下のように答える。

「ええ、まあ！そうでもあり、そうでもなし、って、そうとしか言いようがないですねえ。だって考えてもごらんなさいな、あたし達のようなものは、あの方々と同じ釜のご飯を食べて暮らしたわけじゃないんですから。メレ夫人は良い方でしたよ、とても優しく、でも悩んでいられたことも、たぶん、ありましたでしょうよ、時にはね、ご主人が、あのおり癪癪を起こしたりするから。でもちょっと権高なところはあったけれど、私たちはあのご主人は好きでしたよ。そりゃ、ねえ！あんな風になっているのは、仕方ないですよ！貴族と来た日にはねえ、お分かりでしょう…」

(p. 719)

マダム・ルパのなんとも奥歯にものの挟まった言い方、いかにも見てきたようなものの言いながら、肝心のところはわからぬ、と逃げをうち、しかもおそらく夫人が苦しんでいたに違いないことも仄めかし、夫伯爵の「癪癪の発作」“*des vivacités*”と、「ちょっと権高なところ」“*un peu fier,*”の二点をあげることで、中身を察せよ、と暗に誘う。メレ夫人を「良い方でしたよ、とても優しく」“*une bonne femme, bien gentille*”の言葉は、夫人が積極的に伯爵を愛するのではなく、むしろ夫の横暴を耐えて、無理にも従順に暮らしていることを仄めかす。上さんの話を聞いたビアンションは、「ではどうして夫妻は別居するに至ったのだ、その原因は？」と問わずにはいられない。マダム・ルパは先に公証人が語った内容を察して、グランド・ブルテューシュに絡む物語を紡ぎ出す。

「いえね、」と彼女は言った。「皇帝陛下がここへスペイン人の捕虜、まあ戦争と

かなんだかで捕虜を送ってこられた時、私らは政府から言われて、若いスペイン人を一人泊めなければならかったんですよ。ヴァンドームに仮釈放だということだね。仮釈放といっても、その人は毎日郡長のところへ出頭していましたよ。なんでもスペインの大貴族とかで！でも本当ですかねえ？オスとかディアとかいった名前でしたよ。ああ、バゴス・デ・フェレディアとかいった。」 (p.720)

彼女の話から、「グランド・ブルテーシュ」をめぐるエピソードもまた、大きな歴史の一頁を構成するという作者の意図が見える。先にモンリヴォーが語ったモスクワ遠征におけるロジーナの悲劇に続いて、ここでも皇帝ナポレオンの影が落ちる。プレイヤッド版のニコル・モゼの注するところによれば、帝政時代、フランス全土はヨーロッパ各地の戦争捕虜が割り当てられて、住まわされていた。中でもスペインとイギリスの兵、将校が多かったという⁸⁾。「仮釈放」“prisonniers sur parole”というのは、牢獄に拘束せず、民間その他に居住させて、定期的に出頭させる捕虜をいう。こうした配慮は、兵卒でなく、将校の身分に限ったもので、じっさいヨーロッパでは第一次世界大戦まで、将官は貴族出身者で大半が占められたから、そこに自ずから待遇の差別が出てくる。そしてナポレオン時代はそれこそ絶え間ない戦争であり、勝利を得れば得るだけ、捕虜の数も増え続け、政府の負担もおのずから大きくなった。

ここで登場する若いスペイン人。「スペインの大貴族！」un grand d'Espagne! という表現でわかるように、マダム・ルパはメレ伯爵のことを、「メレさんは美男子でいつまでも見飽きない人でしたよ。ほんとにすらりとしてね！立派な紳士でピカルディの人ですよ。それから、私たちがここでよくいう、癩癪もちではありませんけれど」“Monsieur de Merret était un bel homme qu'on finissait pas de voir, tant il était long! un digne getilhomme venu de Picardie, et qui avait, comme nous disons ici, la tête près du bonnet.” (p.719) と説明したのと較べてきわめて対照的だ。とりわけ、伯爵を「立派な紳士でピカルディの人」un digne getilhomme venu de Picardie としたのに対して、若い捕虜の「スペインの大貴族！」“C'était un grand d'Espagne!” との違いは大きい。彼の名前は Bagos de Férédia⁹⁾。マダム・ルパがフェレディアの風貌を

8) Nicole Mozet, « notes » à l'édition de *la Comédie Humaine*, Pléiade, tome 3, 1976, p.1516.

9) そしてその若いスペイン人の名前 Bagos de Férédia は、もともと原稿の下書きから推して、バルザックが彼の母親のトゥール時代の愛人、Ferdinand de Heredia を考えていたことがわかる、とモーリス・バルデッシュ Maurice Bardèche はその編集したオネットム版のバルザック全集の解説で明らかにしている。しかしそれではあからさまということで、最終的には姓をもとの H を F に換えて、すなわち de Heredia を Férédia に換え、Ferdinand という名前は Bagos、あるいは Balzac という名を意識したこの名前と取り替えたという。そのスペイン人は1805年頃、すなわちフランスとスペインが戦争していた時捕虜となったが、うまく逃げおおせてトゥールに来ていた。このあたり、バルザックの心情をどう読むか。母親に対する一種の制裁か、あるいは物語の背景を飾るのに、一つの実在としてのイメージを大切にしたらからか。しかし物語の解説そのものには、あまり関わりないように思われる。

描く言葉は、メレ伯爵についてのものと違って生彩を極める。

「ええ！そりゃハンサムな青年でしたよ。スペイン人は醜男^{ふおとこ}って言いますけれどね。せいぜい5ピエ2、3プースしかありませんでしたが、恰好良かったですよ。手も小さくて、手入れをしていました。本当に見なきゃわかりませんよ。自分の手にブラシをかけて、まあ女の人が化粧するようにねえ！ふさふさとした黒い髪で、眼は炎のよう、肌の色は少し銅色で、でもそれでも私はそれが気に入りましたね。(略)食は細くって、でも仕草、姿はとても行儀よく、愛らしくて、文句の付けようがありませんでしたよ。」
(pp. 720-721)

5ピエ2、3プースというと、大体1メートル65～68センチくらい。それほど大柄でない。ピカルディ出身のメレ伯爵が「とてもすらりとした男」*tant il était long!*と形容されていたのと対照的だ。しかも若いスペイン人は身だしなみに注意を払い、「黒い髪で、眼は炎のよう、肌の色は少し銅色」*Il avait de grands cheveux noirs, un œil de feu, un teint un peu cuivre*なのは、いかにも情熱的な魅力に溢れて、ただ単に「美男」*bel homme*とだけ書かれていたメレ伯爵と力の入り方が違う。スペイン大貴族の若者、貴公子然とした有様など、女性の心を捉えるのも無理ないと思わせる。それは当然メレ夫人との関わりをも予想させよう。マダム・ルパの語りが続く。

「彼は聖務日課書を読んでいてお坊さんみたいでした。ミサに出かけ、教会のどの式典にもきちんきちんと出ます。いつもどこに座ったと思います？（私たちもずいぶん後で気がついたんですけどね）、メレ伯爵夫人の家族用祭壇のすぐ近くですよ。最初教会に来た日からそこに場所を決めましたから、なにかあの方が意図的にそうしたとは誰も思いませんでした。それにお祈りの本から顔を上げませんでしたからね、可哀想な青年^{ひと}ですよ！そうして、ねえ、旦那、夜になると山地やお城の廃墟を散歩するんです。」
(p. 721)

スペイン貴族は一般的にカトリックの信仰が篤い。教会のミサに出席し、敬虔に日課を果たすのは、スペイン貴族の子弟として当然だ。しかし公証人ルニョーはメレ伯爵夫人が臨終の際「ああ、神様、ああ！」と苦しい息から発して、ベッドにあった十字架に口づけして果てたと語った。敬虔な青年スペイン貴族の姿から自ずと町一番に美しいメレ夫人が思い浮かぶ。じっさい彼が教会に行って占める位置は、メレ伯爵夫人のすぐ傍。ミサにきた最初に、「二人の眼があった」*Leurs yeux se rencontrèrent*と考えられるし、マダム・ルパの言葉もそれを裏付ける。ルニョーが「彼女をコケッ

トな女性と想像していた」と話したこと、上さんの「私たちもずいぶん後で気がついたんですが」の言葉も符牒を合わせる。教会での青年の毎回座る場所が、口さがない町の人々の噂に上ったに違いない。

しかし祈禱書から顔をあげることもできない、うぶな姿、また夜になると山地やお城の廃墟を散歩する姿は、まさしく「世紀病」そのもので、かのシャトーブリアンのルネやコンスタンのアドルフを思い起こさせ、人妻や近親の姉に恋して悩む彼らの心理を読者に想起せしめる。そして、そうした繊細さは、メレ伯爵の *vivacités* 「癩癩癖」と対照的で、そのこともまたメレ伯爵夫人との結びつきを予想させる。しかも青年は散歩に出かけると帰りが遅い。

「拘留の始めの頃から、帰りが遅かったんです。私は心配しましたよ、真夜中12時を打ってからやっと帰って来るんですから。でもみんな彼の気まぐれに慣れちゃいました。住んでいたのは私たちがカゼルヌ通りに持っている家でした。そうしたら、家の馬小屋の馬丁の一人が言うんですよ。ある晩、馬を水浴びに連れていったら、あのスペイン貴族が川の沖で泳いでいるみたいだって。まるで本物の魚みたいに、ね。彼が帰ってきた時、草に気をつけるんですよ、って言ったら、水に入っているのを見られたのをきまり悪がっているように見えました。それがとうとう、旦那、ある日、というか、ある朝行ってみたら彼がいなくなっていました。それから帰ってこないんです。」 (p. 721)

当時のヴァンドームの町の詳細を検討して、青年を住まわせていたというカゼルヌ通りのホテルは *Lion d'or* だという推定もあるが¹⁰⁾、場所の特定はともかく、重要なのは彼が毎晩遅く帰り、それを段々周囲が不審に思われなくなったこと、さらにルパ家の馬丁が、夜中に魚のように泳いでいるそのスペイン貴族の青年、すなわちバゴス・デ・フェレディアを見たことだろう。上さんが何の気なしにそれを指摘すると、バゴスがきまり悪げな様子をした。これは何を意味するのか。川泳ぎも岸辺近くで泳ぐのではない。川の沖合、ということはかなり遠くまで泳いでいる。

ここで冒頭のピアンションの言葉が思い出される。彼は「グランド・ブルテーシュ」の屋敷跡について、「ヴァンドームからそれほど遠くないところ、ロワール川の岸辺に、古い家があって、(中略) この住まいの前には庭園が川に面してあ」と説明していたはずだ。つまり伯爵夫人の「グランド・ブルテーシュ」は、ロワール川の岸辺にぽつんと離れてあり、しかも庭園が川に面してある。昔のロマンチックな物語によ

10) Martin-Demézil, « Balzac à Vendôme », dans Yvon Delbos, *Balzac et la Touraine*, Tours, 1950.

くある川を泳いで渡って恋人の家に行く、そんなことを疑わせるのが、マダム・ルパから、泳ぐのに気を付けてと言われて、バグスが具合の悪そうな反応をすることだ¹¹⁾。

ところが何度かそういうことが続いたある日、青年は宿から消えて、二度と帰って来ない。部屋を探すと書き付けと5000フランの現金、1万フランはするダイヤモンドと宝石箱が残されており、書き付けには、自分が帰らない場合にはマダム・ルパが自分のものにして良いとあり、自分が脱走できたことを感謝し、その後の身の安全を祈るミサの費用にしてほしいと書いてある。当時彼女の亭主が慌てて探しに出て、ブルテッシュ側の川岸の基礎杭みたいなものに引っかかった彼の衣服を持って帰ったが、逃亡の証拠を隠すために、書き付けと一緒に焼却したという。

バグス・デ・フェレディアは下着だけで泳いで逃亡したのか。着物が発見された岸辺が、ちょうどグランド・ブルテッシュの正面に当たるのは、バグスがメレ伯爵夫人に逢うために泳いで川を渡ったのではないか、という読者の想像を裏書きする。しかし本来なら逢瀬の後には、また帰ってくるはずだ。実際彼はいつも12時頃には帰ってきていた。宿の亭主がバグスの衣服を焼き捨てたのは、逃亡の痕跡を消すため、主人夫婦の彼にたいする好感度を示す。スペイン貴族、バグス・デ・フェレディアは人好きのする、魅力ある青年なのだ。彼はうまく逃げおおせたのか。足跡はまったく知れず、衣服も残したままということで、亭主のルパはバグスが溺れ死んだのだと判断する。しかし上さんはそうは思わない。

「この私は、ねえ、旦那、そうは思わないんです。それよりこう思うんですよ。あの人はド・メレ夫人と何か経緯^{いきさつ}がある、とね。だってロザリーが私にこう言ったんです。十字架、あの女主人があれほども大事にして、一緒に墓に納めさせたほどのあれは、黒檀と銀でできていたって。ところがここに住み始めた頃、フェレディアさんが持っていたのも黒檀と銀でできていたんですが、それを彼が持っ

11) 太宰治の『富嶽百景』で、

「モウパスサンの小説には、どこかの令嬢が、貴公子のところへ毎晩、河を泳いで逢ひにいったと書いて在つたが、着物はどうしたのだらうね。まさか、裸ではなからう。」

「さうですね。」青年達も考えた。「海水着ぢやないでせうか。」

「頭の上に着物を載せてむすびつけて、さうして泳いでいつたのかな？」

青年達は笑つた。

「それとも、着物のままはひつて、ずぶ濡れの姿で貴公子と逢つて、ふたりでストオヴでかわかしたのかな？さうすると、かへるときには、どうするだらう。せつかく、かわかした着物を、またずぶ濡れにして、泳がなければいけない。心配だね。貴公子のはうで泳いで来ればいいのに。男なら、猿股一つで泳いでも、そんなにみつともなくないからね。貴公子は鉄槌てつゐだつたのかな？」「いや、令嬢のはうで、たくさん惚れてゐたからだと思ひます。」新田は、まじめだった。

とあるように、恋人に会うために女性が泳いで渡る話も日本に日高川の清姫がいる、という話で終わるが、バグスが魚のように川の先を泳いで、夜遅く帰ってくる、というのと思ひ合わせると、興味深い。

ているのを見なくなりましたからね。」

(p. 723)

「あの人はド・メレ夫人と何か^{いきさつ}経緯がある」と訳した個所 il est pour quelque chose dans l'affaire de Mme de Merret において、“être pour quelque chose dans ~” は、～と関係している、何らかの役を果たしている、という意味で、“l'affaire” が Mme de Merret に掛かるとなると、恋愛 l'affaire du cœur となる。メレ夫人が病床で常に持っていて、墓にまで一緒に入れて貰ったという黒檀と銀でできた十字架が謎を解く鍵だ。夫人がそれを大切にしていたことは彼女の小間使いロザリーがそう言っており、かつ実際にマダム・ルパは、宿に逗留し始めた頃にバゴスが持っていた十字架とよく似ていて、しかも彼が姿を消す頃にはもう眼にしていない、と証言する。メレ夫人の十字架はバゴスから渡ったものではないか。バゴスとメレ夫人の間になんらかの交流があったことを暗示させてマダム・ルパの話は終わる。

「仮釈放」のスペイン貴族、バゴス・デ・フェレディアの失踪が語られるまで、物語の展開が、実に綿密で、緻密に計算されていることは、叙述の順序を冒頭から振り返ればよく理解できよう。まず医師ビアンションのグランド・ブルテーシュの探偵的な散策でその幕を開け、散策の不都合を言い立てる公証人ルニョーが登場、彼の語る「グランド・ブルテーシュ」の持ち主メレ夫妻の物語、とりわけ夫人の悲惨な死に様と、最後の言葉および彼女が最後に口づけする十字架の意味ありげな登場、そして公証人が退場すると、公証人の話を補足するようにビアンションが宿のホテルの上さんが現れてメレ夫妻の生活を語り、その上新しくスペイン人の捕虜に言及する。先に公証人ルニョーが語ったメレ夫人の物語と、その若いスペイン貴族が決して無関係でないことが、マダム・ルパの話からわかり、さらに二人をつなぐ小道具として黒檀と銀の十字架が出てくる。

このように、ビアンション、公証人ルニョー、宿の上さんと、頁を追うに従って語り手が交代しながら、あたかも智慧の輪が簡単そうにつながりつつ、じつは複雑に仕組まれて奥へ、奥へと導くように、それぞれの話の要素を巧みに結びつけながら、次第に焦点が合うように深められていく語りの巧みさは、話の口火を切った公証人ルニョーとそれを引き継ぐマダム・ルパ、それぞれの話の閉じ方の、あまりに同一なパターンが見出されることによって、その入れ子構造の仕掛けがいっそう明確になる。すなわちルニョーはメレ夫人の遺言によってその死後50年経てば、グランド・ブルテーシュの邸と土地を我が物にでき、ルパ夫妻もスペイン貴族バゴス・デ・フェレディアが、自分が帰らねば、残した現金、宝石を彼らに与える、と書き残している。

男女二人の遺言とそれに接した公証人、マダム・ルパの言葉や行動に見られる共通のパターンは、彼らの物語上の道化役者、金に目が眩むプチブルジョワ気質を示して、

皮肉な視点で読者を笑わせる、というばかりではない。あまりに似た二人のパタン、ルニヨー、ルパの上さん、それぞれの語りの中に、一方はメレ夫人、一方はフェレディヤ青年の行動パタンの相似性を、図らずも浮かび上がらせる。カトリック的信教の深さ、隠密な、謎めいた行動、そして自分が居なくなったあとの自分の財産の処分方法など、男女二人のこうした相似は、物語の核心を解く鍵になることを予想させる。入れ子構造をなす語りのパタンは、マダム・ルパが小間使いロザリーの名を上げることで、いま一人の語り手にバトンタッチされ、さらなる話の進展に繋がる。鮮やかな技巧は間然するところがない。

V ロザリーが語り始める

メレ伯爵夫人と一緒に墓に納めさせたほど大切にした十字架は、黒檀と銀でできていたと話した、とされるロザリー、彼女はメレ伯爵夫人の小間使いだったが、彼女の死後マダム・ルパの宿屋の女中となった。その彼女にスペイン人のことを尋ねたのか？とビアンションがマダム・ルパに聞くと、聞いてみたけれども、壁のように押し黙って何も言わない、何か知っている様子ではあるけれど、と答えてマダム・ルパは引き上げる。彼女の話聞いたビアンションがいっそう好奇心に駆られるのも無理はない。

「グランド・ブルテッシュ」、そしてその高く伸びた草、嵌め殺しになった窓、錆びた金具の類、閉じられた扉、人気のない部屋…といったものが、たちまち途方もない姿で私の前に立ち現れた。私はなんとか謎めいた住まいに立ち入って、この荘厳な物語を解く結び目を探そうとした。3人も死んでいる悲劇^{ドラマ}を解くもの。ロザリーが私の眼にヴァンドームで一番興味深い人物として浮かんできた。

(p. 722)

ビアンションの感慨をよく読むと、読者の興味をうまく誘う語りの技巧が要約されている。すなわち「高く伸びた草」*ses hautes herbes*, 「嵌め殺しになった窓」*ses fenêtres condamnées*, 「錆びた金具」*ses ferrements rouillés*, 「閉じられた扉」*ses portes closes*, 「人気のない部屋」*ses appartements déserts*, と、イタリックにした語を見ればわかるように、続け様に暗い、陰鬱な、マイナスのイメージを並べた後、「たちまち途方もない姿で私の前に立ち現れた」*se montra tout à coup fantastiquement devant moi*. と、先のマイナスのイメージが、たちまち幻想的なもの *fantastique* として立ち現れる。まことに鮮やかな逆転の効果。そしてそこから物語展開の核心となる人物ロ

ザリー Rosalie が浮かび上がる。彼女の名に注目しよう。メレ伯爵夫人が珍重した十字架が、スペイン青年フェレディアが持っていたのと同じ黒檀と銀でできていた、と証言する小間使いの名がロザリー。この名はもちろん rose に由来して、いかにも女性の名前にふさわしいが、それは音や視覚から、rosaire、すなわちロザリオを思い起こさせないか？ロザリオはポルトガル語で rosario とあって、l と r の違いがあるから、にわかに同等ということはできないが、しかし語源的には同じバラを想起させるところから来ている。ロザリオはお祈りに使う数珠を言う。十字架から数珠へ。話の展開はロザリーの登場を待っていよいよクライマックスに至る。

ロザリーの印象をビアンシオンは次のように語る。

よく彼女を観察してみると、なにか人に言えないような思いをしていることがわかった。いかにも輝くばかりの健康な感じが、そのふっくらした顔にはっきり現れてはいたけれど。彼女には後悔というか、期待というか、何かそんなものがある。じっさい彼女の態度は、秘密があると言っているようで、あたかも信心に凝り固まった女が過度に祈ってみせたり、子殺しの女がいつまでも我が子の泣き声が聞こえるような、そんな態度なのだ。そうはいっても、彼女の佇まいは素朴でがさつ、その愚直な微笑みからは、何一つ罪を犯しているようには見えない。皆さんだって彼女は無実だと判断したはずですよ。(p. 722)

ここでも読者の興味を思うままに引き回すバルザックのペンに感嘆する。黒檀の十字架の秘密。フェレディアの持ちものがメレ伯爵夫人の手に渡って、彼女の臨終の床にあったのではないか、という推測を働かせていた読者は、ビアンシオンが小間使いロザリーに注目して、「彼女をよく観察してみると」、「彼女にはなにか後悔というか、期待というか、そんなものがある」Il y avait chez elle un principe de remords ou d'espérance と指摘する。「期待」espérance には遺産の望みの意味もあって、「後悔」と「期待」という言葉は、公証人ルニョーやマダム・ルパの打ち明け話から視えるものと同じ事情がロザリーにもあるかのように思わせるが、彼女の「素朴でがさつに」naïve et grossière 笑っている様子から、とても罪を犯しているようには見えない、と最後に先の二人の印象とは異なる姿を導き出す。しかも彼女の秘密ありげな様子を、「信心深い女」とか、「子殺しの罪を犯した女」にたとえて、これまでルニョーやルパの上さんによって語られてきたメレ伯爵夫人の隠微な病床の描写と通じるように、あたかもロザリーが仕えた伯爵夫人その人の隠された罪を、ロザリーが背負っているような印象を与えて、最後にその愚直な微笑みを強調してどんでん返しを喰らわすのである。

しかしそのことでロザリーを無罪放免とするわけにはいかない。ますます読者は一見茫洋とした、いかにも田舎臭いロザリーの愚直なポーズの中に、何か秘密めいたものをいっそう感じるのは当然だろう。ビアンションもまた、まずグランド・ブルテージュの佇まいに秘密の匂いを嗅ぎつけ、ついで公証人ルニョーによって火を付けられ、さらにマダム・ルバが煽り立てたメレ伯爵夫人にまつわる「グランド・ブルテージュ綺譚」を最後まで突き止めぬかぎりはヴァンドームを立ち去るまい、と心に決める。そのためにはなによりもロザリーと親しくなることだ。ビアンションは彼女に近づく機会を窺う。

「ロザリー！」と、ある晩、私は彼女に声を掛けた。「何かご用で？」「君は結婚しないのかね？」彼女は、少しピクツとした。「まあ！男の人には不自由しませんがね、もし気まぐれに不幸になろうなんて気を起こしたときには。」そう言うのと、彼女はにやりと笑った。彼女はすぐに自分の内にある感情の高ぶりから立ち直っている。というのも、あらゆる女性は、貴婦人から宿屋の召使いに至るまで、彼女ら独特の冷静さをもっているものだ。(p. 723)

ロザリーに「結婚しないのか？」と聞くのは、いわば誘惑する手始めの決まり文句に過ぎない。ロザリーは一瞬どきっとするけれど、たちまちビアンションにからかわれていると悟って、逃げを打つ。しかし内心の動揺はビアンションに見破られ、一見ビアンションの質問をはぐらかすように見えながら、自ずと彼女が結婚を不幸をもたらずものと考えていて、彼女が結婚生活の悲惨を体験したか、あるいは見聞したことを推察させる。

恋の口説きがうまくいなされた後の定番のスタイルを取りながら、ビアンションはロザリーに巧みに謎の核心に迫る問いを潜ませて追求していく。

「君は十分ピチピチして若いし、十分食指をそそって舌なめずりさせるほどだから、惚れ込む男に不足しないよなあ！ところで、ねえ、教えて欲しいんだが、ロザリー、どうして宿屋の女中なんかになったのだい、メレ夫人のところを辞めて？あの人は君に年金か何か、残してくれなかったのかい？」「まあ！とんでもない、頂きましたよ！いや本当に、私はヴァンドームで一番いい待遇にしてもらっています。」この返答はいわゆる判事や代訴人が「時間稼ぎの答弁」と呼ぶものだ。ロザリーは、私の見るところ、このロマネスクな物語の中で、チェス盤の真ん中にある升目の位置にいる。彼女はまさしく好奇と真実の中心にいるのだ。私には彼女が事件の核心に結びついているように思われた。(p. 723)

ビアンションがロザリーに掛ける言葉は、いささか直接的すぎるかも知れない。「ピチピチして」*fraîche* といい、「食指をそそって舌なめずりさせる」*appétissante* といい、いずれも女性を食べ物、果実のように形容して生々しい。言葉を向ける女性の知的、情的面ではなく、外観的な、肉体的な魅力を、いかにも直接的な言葉遣いをすることによって煽り、彼女の浮き立った心を捉えようとする。これはロザリーが田舎の宿の女中である、ということも関係していよう。メレ伯爵夫人が公証人ルニョーの眼前で亡くなったのは、1816年頃。公証人ルニョーはパリの公証人口ガンの破産後、ヴァンドームに事務所を開いたのが1816年だとビアンションに話していた。そしてビアンションは彼の師デプランのお供をしてヴァンドームに来たのだから、『無神論者のミサ』で論じたように¹²⁾、宿でのことは1820年前後に違いない。ロザリーがメレ伯爵夫人の小間使いをしていたのが、16～18歳くらいとして、現在20代半ば、というところか。ビアンションは1796年生まれだから、その時30歳少し前。つまりロザリーとそれほど年齢の隔てはないから、彼が彼女から秘密を解く鍵を得ようとして一見誘惑的な言辞を用いるのもあり得る。

ロザリーをお世辞で喜ばせたあと、ビアンションはメレ伯爵夫人の邸を出た理由を尋ねる。「あの人は君に年金かなにか、残してくれなかったのかい？」“*Est-ce qu'elle ne vous a pas laissé quelque rente?*” と聞くのは、これまでの公証人ルニョー、宿の上さんルパが、それぞれにメレ伯爵夫人、スペイン貴族フェレディアから遺贈を受けていたのと同様に、ロザリーもまた同じパタンの告白を予想させる。ところが彼女は、これまでの二人と異なり、「まあ！とんでもない、頂きましたよ！」“*Oh! que si!*” のみで済ませ、彼女がそのことに十分満足していることを言いながら、しかも先の二人のように具体的な金額など示さず、あくまで抽象的にしか答えない。そのことによってビアンションは彼女が事件の核心を握っていることを悟るのだ。この点でも、バルザックが簡単に書き流しているように見えながら、いかに神経の行き届いた綿密な計算のもとに書き綴っているかを実感させる。ここでロザリーに特別の光が当てられることになる。

この娘をよく観察すればするほど、彼女の中に、私たちが恋心を寄せるあらゆる女性と同じように、多くの美点を見出した。清潔で、よく気が付き、そして美人、これは言うまでもない。(p. 723)

これまで物語の中でほとんど言及されず、注目されることのなかった宿屋の女中ロ

12) 柏木隆雄『バルザック詳説』第Ⅰ部第7章参照。

ザリーは、マダム・ルパの十字架の話から、にわかになに一つの物語中の魅力的な女性としてクローズアップされる。それまでの公証人ルニョーやマダム・ルパの扱いとは異なる巧妙な展開だ。メレ伯爵夫人の小間使いだった女性、しかも思いも掛けず、「清潔で、よく気が付き、そして美人」の小間使いがどんな話をするのか、読者の好奇心はますます高められる。そして公証人ルニョーがビアンションに最初にメレ夫妻の話をしてから2週間後のある日、ビアンションはそのロザリーにメレ伯爵夫人について知っていることを話してくれと頼む。その文章、

公証人ルニョーの訪問から2週間後のある夕方、いやむしろある朝か、なにしろずいぶん早い時刻だったが、私はロザリーにこう言った。「話してくれないか？ さあ、さあ、君がメレ夫人について知っていることを全部。」「まあ！」と彼女は応じたが、ぞっとした様子だった。「どうかそんなことは聞かないでくださいな、オラースさん！」
(p. 723)

「ある夕方、いやむしろある朝か、なにしろずいぶん早い時刻だったが」 un soir, ou plutôt un matin, car il était de très bonne heure というのは、よく考えると実に妙な言い方だ。最初は夕方（あるいは夜）といい、次に朝の時間、さらに「ずいぶん早くから」というのは、重大な事実の告白に関わる場面だから、いっそう鮮明に覚えているに違いないのに、このはぐらかしの語法は、あるいはそれこそロザリーの ami（友人、あるいは恋人）になっても彼女から秘密を聞き出す、と言ったビアンションの話の裏付けになっていないだろうか。すなわち夕方に、と言い、朝に、と言い、あるいはロミオではないが、朝とても早くから、となると、いかにも二人で過ごした一夜のエピソードが語られるような雰囲気さえする。というよりは読者にそうした推測を、はっきりとしたイメージではなく、それこそぼんやりとした憶測をさせるところにバルザックの巧妙さがある。だからこそ、ここでビアンションにロザリーを「君と呼ぶ」 tutoyer のだ。それまで公証人はもちろん、宿の上さんにはもちろん「あなたと呼ぶ」 vouvoyer だった。またロザリーに結婚しているかどうか、ビアンションが問いかける場面では、もちろん vouvoyer である。ところが、ここでとつぜん tutoyer の呼称がくるのは、宿の女中に対してとしても特別な意がこもっていることを示すだろう。しかも公証人の訪問から2週間、ということはマダム・ルパの話の聞いてから2週間ということでもある。そしてその話のあとにロザリーの可愛さ、美しさを強調するのである。「グランド・ブルテージュ」の秘密を知るためだったら、それこそ彼女の恋人 ami にでも喜んで成ろう、と書いたビアンションだ。2週間は甚だ意味深長な期間というべきだろう。

そして問われたロザリーは、「オラスさん！」Monsieur Horace!と呼んでいる。姓ではなく、ファーストネームで呼ぶのは、親密さを表すものにほかならない。まして彼女はそれこそ女中の身分なのだ。はたしてそういう親密な関係になったかどうかはともかく、「語り手」としてのビアンシオンは、デ・トゥッシュ嬢を始めとするサロンの聴き手たち、それこそ恋愛の達者たちの前で、恋愛の影を仄めかしているわけなのだ。プレイヤード版のこの短編の編者モゼは、この Monsieur Horace! のところに注をして、初版では元のテキストの語り手である Auguste de Villaines だったのを Werdet 版で Bianchon に改めたと書いているが¹³⁾、それは貴重な情報ではあろうが、このテキストを読む上で、あまり大きな意味を持たない。むしろロザリーがファーストネームで呼ぶことで、二人の親密の度合いが計られて、2週間の意味をますます深くさせることがポイントなのである。

したがってロザリーが困惑して、顔を青白くさせながらも、「じゃ、あなたがそう望んでいらっしゃるから、話しましょう。でも私のために秘密は守って下さいね！」(p.723) という言葉を吟味すれば、「あなたがそう望んでいらっしゃるから」 puisque vous le voulez が注目すべきで、そういう親密な関係になった今こそ、ビアンシオンが望むように、秘密を明かすということになる。ロザリーを tutoyer するビアンシオンと違って、彼女が vouvoyer するのは、もちろん身分として相手への尊重が表明されているからだ。公証人やマダム・ルパが伯爵夫人のことを話したのは、それぞれ自分の利害に絡んでいることと、いわゆる噂話に興が乗るからに過ぎない。しかしロザリーは伯爵夫人に対しての思い入れが深く、「清潔で、よく気が付く」娘なのだ。先の二人と違って彼女は容易に秘密を語らない。その彼女が思い切って真実を語るのは、それだけの条件を備えなければならないだろう。すなわち「愛」、「恋」というものである。そして「愛」を知るロザリーによって伯爵夫人の秘事が明らかにされるのも、「愛」がテーマであることを予想させる。バルザックの小説構成は、じつにぴったりと決まっている。

そのロザリーが長々と語ったという物語を、ビアンシオンが長すぎるから、と彼が要約する形で以下物語の真の語り手を務めることになる。「グランド・ブルテッシュ奇譚」は、ビアンシオンの語りから始まって、公証人、ルパの上さんと語りの揺れが続き、宿屋の女中ロザリーに焦点が当てられ、ロザリーがいよいよ話を始めるところで、再び最初の語り手ビアンシオンが引き取って、みごとに締め括られる。

13) Nicole Mozet, *op.cit.*, p. 1517.

VI 物語の真相

ビアンションはまずグランド・ブルテッシュの邸の構造から説く。メレ伯爵夫人の居間は「グランド・ブルテッシュ」館の一階にあり、その部屋の奥の壁には1メートル20センチの奥行きのあるキャビネットが壁にはめ込まれて、夫人の衣装箆筒として使われていた。ちょうど事件の起こる3ヶ月前からメレ伯爵夫人は体の具合が悪く、夫は彼女を一階に一人寝かせて、自分は二階に起居していた。その日たまたま以下の理由から夫はいつもより2時間ほど遅く町から帰ることになる。というのも、

そこで、フランスの侵攻が話題となって激しい議論となり、玉突きの勝負もまた熱がはいって、彼は40フランも負けてしまった。皆が貯蓄に励み、生活も賞讃に値するほどの質素さのヴァンドームでは相当な額だ。(略) 邸に帰ると、彼はふとメレ夫人の所に立ち寄って、自分のついていなかったことを話そうとした。おそらくはそうして自らを慰めようと思ったのだろう。(p. 724)

伯爵が毎晩行って新聞を読むことにしているクラブで、フランスの侵入が話題になる。おそらくは1823年のフランスのスペイン干渉のことを指すか。こうした特定の話題をさりげなく挿入することで、物語の展開する時期を暗に示すところが心憎い。さらにこのことで、「仮釈放」で当地にいるスペイン貴族の存在も背後から浮かび上がっても来る。またビリヤードで彼が負けた金額40フランを「ヴァンドームでは相当な額」“somme énorme à Vendôme” は、これも単なる金額の提示以上の意味を持つ。すなわちヴァンドームではみな儉約を旨として「賞讃に値するほどの質素さ」で生活していた、と続くことによって、最初の語り手の二人、ルニョー氏とマダム・ルパが、メレ夫人やバゴス・フェレディアが残した財産への強い思い入れも腑に落ちるわけだ。そして僅か、とは言わないまでも、それほど高額にも思えない玉突きゲームの負けが、伯爵をなんとなく不快な思いにさせたのは、町一番の金持ちであるはずのメレ家の当主として、いささか肝が小さいように思われるが、そこにピカルディから流れてきた貴族という彼の正体も暗示されているように思われる。

いつもなら町から帰ると、すぐ2階の自分の寝室にそのまま向かう伯爵だったが、その夜は上記の経緯で、妻の寝室を覗いてみることにした。

晩餐の折、彼はメレ夫人がとてもおしゃれな装いをしているのに気づいていた。彼は、クラブから自分の家に帰る途中、こう一人ごちた。「妻はもう苦しい時期は済んだのだな、病気が良くなったので綺麗になったんだ。そして彼はやっとそ

のことに気がついたのだった。ちょうど夫という夫がすべてに気がつくのに、少しばかり遅いのと同じように。
(pp. 724-725)

外出する前の晩餐の席で見た妻の装いがおしゃれになっているように気づいて、案外あれも綺麗ではないかと思ったりするのだが、いわゆる後で気がつくなんとやらで、家路に着くときにふと頭に浮かぶ。勝負に負けた悔しさが、侘びしさに変わり、それが妻を恋しくさせるという、よくあるパターンをメレ伯爵も辿っていることになる。彼は台所で忙しそうにしているロザリーには声を掛けず、そのまま自ら角燈を取って妻の部屋に向かった。夫人の方は夫はいつもの時間に帰って、すでに寝入っているものと考えていた。ところが、

彼の足音はすぐわかる。廊下の丸天井に響きわたるのだ。この紳士が妻の部屋の鍵を回したその時、彼は例のキャビネットの扉が閉まるのが聞こえたような気がした。しかし、彼が入ってみると、メレ夫人だけで、彼女は暖炉の前に立っていた。
(p. 725)

伯爵はドシ、ドシと足音を響かせてやってくる。夫人は伯爵と知って、ベッドで寝たままで迎えずに、起きて夫を部屋に招じた。それは何の不思議もない。しかし、ここで伯爵が「この紳士」le gentilhomme と表記されているのは、同じ語の繰り返しを避けるレトリックではあろうが、「紳士」がノックをせずドアの鍵を開ける行為への皮肉が感じられるかもしれない。伯爵には壁に嵌め込んであるキャビネットの扉が閉まるような音がしたと思われたが、入ってみると伯爵夫人がいるだけ。ただ夜遅くなって、体の具合も悪いはずの夫人は、本来寢床に休んでいても良いはずのところを暖炉の前に立っている。

バルザックの小説は、物語の始めは、いささかくどいほどの、ゆっくり、錯綜した形で語られているように思われるが、いよいよ物語が佳境に入ると、息もつがせぬ勢いで一瀉千里、大団円へと突っ走っていく。「グランド・ブルテッシュ奇譚」も、まさしくその典型と言うべきもので、数語、数行読み解いていくのさえもどかしい。

夫が単純に心の中で考えたのは、ロザリーがそのキャビネットに入っている、ということだった。ところがふっとある疑いが鐘の鳴るように耳の中で響いて、猜疑心に捉えられた。じっとわが妻を見る。するとその眼に何とも知れない動揺と獣めいたものがあるように思われた。「あなた、お帰りがずいぶん遅かったのですね。」と彼女が言う。その声は普段はとても澄んで、とても優しいのが、少し

いつもと変わっているように彼には思われた。(p. 725)

直接妻の部屋にやって来る際には、ロザリーは台所にいると思っていた。だから妻の用事でキャビネットの中にいて、物音を立てたと伯爵は考えたのだ。しかし「ある疑い」*un soupçon* から「猜疑」*défiance* まで、この伯爵の心の中の変化は、鐘が鳴る音も含めて、きわめて印象的に、鮮やかに読者を捉える。*un soupçon* は、あるいは～ではないのか？と疑うことであり、そのまさかという疑いが、一瞬頭をよぎると、*défiance* ははっきりした不審の意志に変わるのだ。そして妻を見る。引用した部分の原文にある動詞、*« Le mari pensa »* から *« un soupçon qui lui tinta »*、*« mit en défiance »*、そして *« il regarda »*、さらに *« et lui trouva »* まで、下線を引いたように単純過去が列挙される緊迫した使い方も注意しておこう。伯爵が妻の目に注目し、そこに「何とも知れない動揺と獣めいたもの」を発見する *« lui trouva dans les yeux je ne sais quoi de trouble et de fauve »* のも意味深長だ。*fauve* を、「獣めいた」と訳しはしたが、*fauve* は本来獣の毛色や眼のどんより黄色になったものを言う。つまり伯爵夫人の目は、普段の澄んだ眼の色ではなく、動揺してきらきらと光っているのだ。そして彼女の声もまたいつものものではない。それが伯爵の猜疑を生むことになった。夫人の問いに、黙ったままで返事をしないでいるメレ氏。その時、夫人の部屋のキャビネットの中にいると思っていたロザリーが部屋に入ってくる。

それは彼にとって雷の一撃だった。彼は寝室を行ったり来たりした。一方の窓からもう一方の窓まで、同じ動きで、腕を組みながら歩く。「何か嫌なことでもありまして？それとも具合が悪いの？」とおずおずした様子で妻が尋ねた。その間ロザリーは夫人の衣服を脱がせに掛かっている。彼は黙ったままだ。「下がっていいわ」とメレ夫人が小間使いに行った。「髪の手紙は自分でするから」彼女は何か嫌なことが起こりそうだと夫をちらと見るだけで悟り、二人だけでいいと思ったのだ。(p. 725)

キャビネットにいたと思っていたロザリーは、彼が部屋に入った時にはいなかった。では妻の部屋で聞こえたと思った音は何だったのか。彼が「一方の窓からもう一方の窓まで行った」*en allant d'une fenêtre à l'autre* と記されるのはなぜか。あるいは誰かそれまで部屋にいて、伯爵の来るのに慌てて窓から飛び出したのではないか（彼女の部屋が一階にあることはその疑いを起こさせるに十分だ）、という伯爵の、と同時に読者の疑いを伯爵夫人の行動に移す動きにほかなるまい。先に「晩餐の折、メレ夫人がとてもおしゃれな装いをしているのに」伯爵が気づいていたことを思いだそ

う。ロザリーが夫人の夜着を着替えさせにやって来てもいる。すなわち夫人は晩餐の折のコケットな装いのままでいたのだ。このこともさらに疑念をいや増す一つの要素となる。

沈黙する夫に異常なものを感じた妻は、二人だけで話す必要に駆られてロザリーを下がらせる。小間使いはいったんドアの外に出るが、しかし完全に立ち去らず、廊下で様子を窺う。すなわち、なぜこの夜の秘密の出来事が後で詳細に知られるのかをそれで解き明かしている。

Ⅶ 夫の提案

妻と二人きりになったメレ氏は、彼女の目の前に立って、冷たくこう言い放つ。

「ねえ、君。誰かいるね、君のキャビネットに！」妻は夫をじっと見る。落ち着いた様子だ。そして彼に短くこう答えた。「いいえ、あなた」。この「いいえ」にメレ氏はぐさっと来た。彼にはそうは思えない。しかもその時ほど自分の妻が清らかで、宗教的な感じに見えたことはなかった。彼は身を起こすとキャビネットを開けに行こうとした。メレ夫人はその手を掴むと、引き留め、彼をメランコリックな様子でじっと見つめた。そして妙に動揺した声でこう言った。「もしあなたが見て、誰もいなければ、思っても見て下さい、すべてが私たちの間で終わりになるってことを！」

(pp. 725-726)

「君」「Madame」と夫が呼びかけるのは、からかってのことか、改まった時か、のどちらかだ。「あなたと呼ぶ」*vouvoyer* も当時の貴族の場合、よくあり得るが、男性の場合には妻に「君と呼ぶ」*tutoyer* することが多い。メレ氏が妻に向けて *tutoyer* で話した例をこれまでの文に見出さないから（これまでの経緯がすべて第三者の語りによっているから当然のことではあるが）、決定的なことは言えぬものの、少なくとも冷ややかな言葉遣いであることは間違いない。夫に誰かいるかと聞かれて、妻があまりに素っ気なく「いいえ」とだけ答えたことに夫の気持ちがふっと残忍なものになったのだ。ここでも夫がビリヤードで負けて愉快的な夜を過ごさずに帰ってきた伏線が活きてくる。妻に慰撫を求めて部屋にきたのだから、応対に優しさのあるものであれば、夫の態度はまた違ったものになったかも知れない。なぜ素っ気ない「いいえ」とだけ答えたのか。どうして愛を込めた返事ができなかったのか。おそらくキャビネットの中にいる「者」に、そうした夫への愛嬌を示す自分の声を聞かせたくなかったからではないか。そして夫は敏感にその単簡な「いいえ」の意味を悟ったからこそ、

キャビネットの扉を開けようとしたのだ。もしそこに「男」が本当に潜んでいれば、それこそ決定的なことになる。そのぎりぎりの瞬間に夫を引き留める夫人の行為と言葉は、ほとんど生死を賭ける必死のものだった。そのゆえにこそ夫の眼に、これまでにない、「清らかで、宗教的な感じ」で迫るのだ。

信じられないような立派さが妻の態度にくっきりと浮かんで、その紳士に彼女への深い尊敬の念を抱かせた。そこで彼が思いついた解決策は、それがもっと大きな舞台だったら不朽となるはずのものだった。「いや、」と彼は言った。「ジョゼフィーヌ、止めるよ。どちらになっても、二人は永遠に別れることになるからね。僕は君の魂がじつに清らかなことは承知しているし、君が淨い生活を送っていることも知っている。君は死に値する罪を命を賭けてまで犯そうとは思わないよね。」この言葉に、メレ夫人は取り乱したような眼になって、夫をじっと見た。

(p. 726)

伯爵夫人についての「これまでにない、清らかで、宗教的な」姿という形容は、ある種の決定的な瞬間における女性の美を言う時によく使われる。犯しがたい育ちの良さ、それを目の当たりにした夫を、ここでまた「紳士」gentilhomme と形容するのは、田舎貴族としての夫の在りようと、またたとえ遊び人であろうと、ブルジョワではない、身分上の在るべき態度に彼が思い当たったことを巧みに表す。そして同時にgentilhomme としての解決策についても二様の視点を示すだろう。すなわち後に明らかになるように、あからさまでもなく、しかし極めて残酷な策。「大きな舞台だったら不朽のものになる」と書かれるのは、おそらくは大きなどんでん返し、悲劇の舞台を予想させるものだ。またここで、伯爵の言葉遣いが、これまでの「あなたと呼ぶ」vouvoyer でなく「君と呼ぶ」tutoyer になっていることにも注意。先に「マダム」と呼んでいたのが、メレ夫人のファーストネーム、ジョゼフィーヌとなる。ジョゼフィーヌはナポレオンの妻の名前でもある。先のモンリヴォーのモスクワ遠征のエピソードに繋がる糸がさりげなく織り込まれて、目の前の妻ジョゼフィーヌの性行について、正面から褒め上げる。この真綿で首を絞めるようなものの言い、メレ夫人は、いっそう不安な気持ちを高めたに違いない。夫が提案する解決策とはどのようなものか。

「ほら、ここに君の十字架がある」とその男は付け加えた。「神の前で僕に誓いたまえ、そこには誰もいない、とね。僕は君を信じるよ。決してこの扉を開けることはしない。」メレ夫人は十字架を取った。そしてこう言った。「誓います。」

「もっと声を大きく」と夫。「そしてこう言うんだ。『私は神の御前で誓います。キャビネットの中には誰もいません』と。」彼女はその言葉を動揺することなく繰り返した。「それでいい」と冷たくメレ氏は言った。(p.726)

問題の十字架がここで登場する。まことに鮮やかな小道具の使い方。しかも十字架に言及するのを「夫」*mari*とせず、「その男」*cet homme*とあるのは、もちろん繰り返しをさけるのもあるが、それこそ男としての面子と嫉妬の情をその呼称の背後に感じさせるためだろう。十字架を捧げての神の称名は、信心深い夫人にとって、拒むことができず、まして、キャビネットの扉が開けられるか、否かの瀬戸際で、最初の答えは小声だったのが、促されて二度目に夫の言葉を繰り返す時は、いかにも腹の据わったもの言いとなる。さらに妻の決然とした答えを聞いて、いっそう冷たい憤りを増す夫。応酬の呼吸は間然するところがない。

メレ氏は彼女が誓う十字架に眼を止めて、良いものを持っているね、僕の知らないものだがどうしたのか、と聞く。夫人は昨年スペインの捕虜たちがヴェन्दームへ連れて来られた時、町の宝石商デュヴィヴィエが買い求めたものを、彼から譲り受けたと答える。それを聞いた夫はロザリーを呼び、部屋の片隅に連れていくと、ゴランフロという石工の青年が一人前の親方になれば、お前と結婚したいと言っているそうだが、その資金を出してやるから、今すぐ邸に来るように呼んで来るように、と小声で言い、さらに御者を兼ねる腹心の召使い男に邸の男連中にもう皆寝るように命じ、そして皆が寝静まったら、そのことを自分に報告しろと矢継ぎ早に指示する。彼にはどんな意図があるのか。

メレ伯爵はそれらの処置を終えるや、それまでの妻との応酬が無かったように、町のクラブでの議論や玉突きの勝負を語り、ロザリーが戻ってきた時は、夫婦はじつに和やかに談笑していた。ここでクラブでの議論とビリヤードの勝負を思い起こそう。クラブではフランスの他国への侵入が話題であり、ビリヤードの勝負は伯爵の40フランの負けで、おおいに損失を蒙ったのではなかったか。いま帰宅した「グランド・ブルテッシュ」において、何者かが「侵入し」、その有無を必死の妻と賭をして、その勝負のためにロザリーや石工に大枚を支払うことを約束する。この相似の妙。バルザックの構成はかく鮮やかだ。

折しもその頃、メレ伯爵は建物の改造を行っていて、石膏などの材料を大量に邸に買い込んでいた。ロザリーから話を聞いた石工のゴランフロがやってくると、伯爵は彼とロザリーを身近に呼び寄せ、今すぐ邸にある石膏で壁に嵌め込んであるキャビネットの扉を塞ぎ、仕事の間一步もこの部屋を出ず、寝泊まりもここでし、仕事が終われば旅に出る、その費用は出してやるから今夜のことはロザリーともども秘密にし

て一切喋らぬことを約束させる。命じられた石工は、ロザリーに髪を梳かせるメレ夫人の目の前でキャビネットの扉を塗りつぶす仕事を始める。

職人が煉瓦を下ろす作業をし、夫が部屋の端に行った時を捉えて、メレ夫人はロザリーにこう言う。「1000フラン、年金として上げる。いい子だから、下に隙間を開けておいてくれるようにゴランフロに言って。」それから声を大きくすると、彼女はロザリーに落ち着いた調子でこう言った。「さあ、あの人の手伝いをして！」メレ夫妻はじっと黙ったまま、ゴランフロが扉を塗り込める間、ずっとそこにいた。

(p. 728)

夫もロザリーと石工を買収したが、妻もまたキャビネットの人物を何とか助けようと必死に智慧を絞り、ロザリーに高い年金を示して味方につけようとする。ひたすら作業する石工とそれぞれの思惑を胸に秘めたままにいる二人。恐ろしい場面というほかない。壁が半分ほど塗り込められた頃、伯爵が背を向けた瞬間に、石工は鶴嘴でキャビネットの扉のガラス格子のところにそっと一撃を加える。その時部屋にいるメレ夫妻、ロザリーの3人に見えたのは「男の暗く、褐色の顔と黒髪、炎のような視線」(p. 728) だった。夫が振り返る前に、哀れな女は頭を振ってその外国人に合図をする。「希望を持って！」と。

ここでキャビネットを塗り込める漆喰の僅かな穴から見える男の顔色、髪の毛、眼の色が、先にマダム・ルパの話のとおりで、先に失踪したとされるスペイン貴族の若者であることが明かされる。まことに際どい夫人の所行だが、「希望を持って！」Espérez! は、デュマの『モンテクリスト伯爵』の最後にも使われる、フランス人の好きな言葉の一つだ。

時は9月、明け方近くにほぼ作業が終わり、石工も伯爵も召使いのジャンも同じ夫人の部屋で夜を明かすことになった。こうした伯爵の厳しい監視の下、夫人には為す術がない。ところが伯爵は「しまった！パスポートを取りに町の役所に行かないといけなかった」と急に言い出すと、帽子を被って出ていこうとし、思い返したように、十字架を取りに戻り、それから屋敷を出ていく。

伯爵夫人は幸運に身を震わせ、ロザリーを呼び鈴で呼ぶと、「鶴嘴よ、鶴嘴！」と叫ぶ。すぐロザリーが斧を持ってきて彼女に渡す。夫人は何ものにも例えようのない激しさで壁を剥がす作業にかかった。幸運にも彼女に味方するように夫は十字架の出所を調べるために宝石商を尋ねるために遠出をしたのだ。メレ夫人の必死さが伝わるような描写が続く。

彼女はすでに幾つかの煉瓦を外して、いよいよ今度は弾みをつけて、これまでよりいっそう強く一撃を与えようとした、ちょうどその時、自分の後ろにメレ氏がいるのに気がついた。彼女は卒倒した。「奥さんをベッドへ」と冷たくその紳士は言い放った。自分の留守の間にどういことが起きるか、予め予想していた彼は妻に罌を掛けていたのだ。自身で行かず役所に手紙を書き、そして宝石商デュヴィヴィエを邸に来るように人をやったのだった。(p. 728)

分析の必要も無いくらい、ぎりぎりのクライマックスで、髪振り乱しての伯爵夫人の煉瓦を外す奮闘と、それを後ろから冷たく見守る夫。それこそ鳥肌が立つくらいに恐ろしい光景だ。やってきた宝石商に夫人の目の前で夫人が説明した十字架購入の事実を確かめると、宝石商はそれを否定。それを聞いた夫は虎のような目つきで彼女を睨み付け、召使いに、以後食事も夫人の側で取ると言い渡す。その夫の言葉。

「妻は病気だ。だから僕はこの人が回復するまで彼女から離れないことにする。」残酷なこの紳士は20日間というものの妻の傍らに居続けた。最初の間、塗り込められたキャビネットで何か音がし、ジョゼフィーヌが彼に嘆願して死にかけているその誰とも知れぬ人間を助けてやって、と頼んでも、彼はこう答えた。彼女に一言も言わせないで。「君は十字架に掛けて誓ったじゃないか、あそこには誰もいないって」(p. 729)

ビアンションが冒頭に語ったグランド・ブルテーシュの館の日時計に刻まれた文字がULTIMAM COGITA!であったことが、最後にいたってしみじみと思ひ浮かぶだろう。まさしく伯爵夫人が大事に持ち、今伯爵が傲然と示す十字架は、この銘句の形ある姿にほかならない。こうしてみると、最初に公証人ルニョーが語った伯爵夫人の慎ましい最後の姿は何だったのか？表は善人面をした伯爵の徹底して冷酷な本性が、「残酷なこの紳士」le cruel gentilhommeの表現で尽くされる。「グランド・ブルテーシュ綺譚」において、彼を指して「紳士」と書かれるのは、全部で11回¹⁴⁾。ほとんどが単に「紳士」gentilhommeとあるが、もちろん「貴族」と訳して良いが、やはり氏、育ちと身分をはっきり示す以上に、やや古風な品格を含蓄するから、言及される度にその意味合いが文脈に従って皮肉なものとなるのはすでに述べた通り。それら11回のうち形容詞が付加されるのは2回のみ。一つはマダム・ルパがビアンションにメレ伯

14) 霧生和夫によるバルザックのテキスト（『人間喜劇』、初期作品、書簡等の各語索引）は、現在パリ、バルザック記念館のサイト Vocabulaire de Balzac で検索することができる。

爵の風貌を初めて紹介する際、「ピカルディ出身の立派な紳士で、すらりとした背の高い、活発な美男」*tant il était long! un digne gentilhomme venu de Picardie* (p. 719) という個所で、「立派な」*digne* の形容は、悲劇の発端の一方の主演の紹介として、きわめて意味深く、付与されていることが、以後にその形容が付されないことにも視られる。

Gentilhomme に形容詞が付されるもう一つの、そして最後の例が、伯爵夫人の必死の救出作業を背後から冷ややかに眺めて言い放つ際に、「残酷なこの紳士」*le cruel gentilhomme* と書かれる文章だ。これまでほとんど形容詞が添えられなかったこの「紳士」が、実際のところは「残酷な」紳士であることを、結末にいたって明らかにするこの超絶技巧。いわば満を持しての形容詞の登場ということができよう。そこで最初にメレ伯爵に付いた形容詞 *digne* (立派な) は、メレ伯爵夫人にも付されていたことを思いだそう。夫がまさにキャビネットの扉を開けようとした際、もし開けて誰もいないということになれば、二人はおしまいになる、と警告した夫人を目の前にした夫は、「信じられないような立派さが妻の態度にくっきりと浮かんた」*L'incroyable dignité empreinte dans l'attitude de sa femme* (p. 726) のを見る。夫と妻の双方に *dignité* の文字が付されるが、その対照的な意味合いは、この場面のすぐ後に来る *le cruel gentilhomme* の語によってみごとな効果をあげるだろう。いわばアンリ・ド・マルセーの初恋の話、モンリヴォーの「大佐の女」の悲惨、そして「グランド・ブルテッシュ」のドラマをひとまとめにした形で、メレ伯爵夫人の *dignité* に女性のありようが要約されることになる。

その *dignité* を守るために、伯爵夫人は、キャビネットに潜んでいるものについて、ついに一言も喋らず、夫の伯爵もキャビネットの中で音がまったく絶えるまで、妻のベッドを離れない。「残酷なこの紳士は20日間というもの妻の傍らに居続けた。」とある20日は、極めて意味深長な期間ということになる。そして読者は最初に公証人ルニョーがビアンションに対してメレ夫妻の奇妙な生活を語る話を思い出すだろう。伯爵は「その後」、夫人を伴ってメレの館に帰り、自分一人パリに出て放蕩を尽くす。一方夫人は「グランド・ブルテッシュ」の「家具をすべて」焼き払い、ただひたすら死を待つ。公証人ルニョー氏の話、マダム・ルパの話、そしてビアンションが要約して語るロザリーの話の繋げれば、メレ伯爵夫人の死の真相が、あたかも何枚も何枚もその経帷子を剥ぐ形で現れ出る仕掛けになっていることに思い至るだろう。

いくつかのエピソードをつなぎ合わせた『続・女性研究』の最初のアンリ・ド・マルセーが語った初恋の女は、医師ビアンションが見守る中、瀕死の身ながら、傍らの夫の侯爵を気遣い、彼への優しい愛情を示して、穏やかに、静かに死んでいく。そしてモンリヴォーが語る「大佐の女」のロジーナは、不倫の相手と共に焼き殺される。

そしてメレ侯爵夫人は愛人が餓えと乾きで苦しむのを間近で感じながら、救うことを夫から禁じられて、その罪を背負ったまま残酷な形で果てる。女性の「裏切り」の代償の怖ろしさが、サロンでの話の展開と共に深刻さの度合いを増し、ビアンションが最後の物語の話し終えた後、

女性達は皆テーブルから立ち上がった。そしてビアンションが彼女たちを捉えていた魔力もまたこの動きとともに消え去った。とはいえ、彼女たちの何人かはこの最後の言葉を聞いて何か寒気のようなものを感じたのだった。 (p. 729)

と『続・女性研究』全体が締めくくられるのは、まことに語りの魔 (charme) の力を示して遺憾がない。